

戦争一色 暗かった私の青春

無職

(奈良県 86)

70年前の私は16歳。1937年から満鉄(南満州鉄道)社員
の父の仕事で奉天(現・瀋陽)
などで暮らし勤労奉仕の日々。

戦争一色の教育を受け、日本は負けないと思っていたものが音をたてて崩れた敗戦後、強くて整然としていたはずの日本兵の中には軍の物資を勝手に持ち出し、民家に居座る者もいて驚いた。46年9月、葫蘆島(遼寧省)から引き揚げ船に乗り、10月に博多港に着いた。引き揚げ中に亡くなった人はその場に置き去りにするしかなかった。

やさしいものではない。男性は詰め襟の国民服、女性は皆千んぺ姿。いつも飢えていて、食べ物に米を、おかゆや焼き米にしたものだった。

戦争を知らぬ政治家が米国の顔色をうかがい、また戦争で生きる国にしようと言ひ合ひ、「嫌だ」という国民の声に耳を貸さないのは何だと言いたい。戦争できる国になれば自衛隊に入る人はいなくなり、いつかは徴兵制になるのではないか。言論の自由が奪われ戦前と同じ道を辿るのでは、と心配している。

若者がいきいきと働ける日本であってほしい。青春を暗い時代に生きた者として心から願わずにはいられない。

異国で眠る日本兵を生むな

主婦

(大阪府 65)

7月初め、中央アジアのウズベキスタンを旅しました。首都タシケントでは、日本人抑留者79人が葬られている郊外の墓地を訪れました。きれいに整備され、墓守の人もおられました。

第2次世界大戦で捕虜にされた日本の兵士たちは、厳しい労働の末、今も異国で眠っています。記念碑の裏面には出身県とお名前が刻んでありました。日本人捕虜が建設に携わったというナポイ劇場も見えました。

太平洋戦争ではアジア地域の人々約2千万人が亡くなり、日本人も約300万人が犠牲にな

りました。私の母もフィリピン戦線で兄を失った悲しみは癒えず、「二度と戦争は嫌だ」と言いながら亡くなりました。

戦争体験者が年々減っていく中、安倍政権は安全保障関連法案の成立を狙っています。安倍晋三首相の「国民の命を守る」との言葉を聞く度に、リスクが高まる自衛隊員も守るべき国民の一員ではないのかと憤りを覚えます。自民・公明の議員には「自分の子は戦場に行かせるのか」と聞きたいです。

日本が他国軍の戦争に巻き込まれ、海外で捕虜となって、再び「日本人墓地」ができるような世の中は、絶対に嫌です。